

太宰治「魚服記」試論

―逃れられなかったスワ―

山 田 佳 奈

はじめに

昭和八（一九三三）年、二十四歳の太宰治は、「魚服記」を「海豹」三月号に発表した。「魚服記」は同人間で評判となり、これをきっかけに太宰は文壇デビューへの足がかりを得る。また「魚服記」が発表された昭和八年は、太宰が「太宰治」という筆名を使い始めた年でもある。つまり、名実ともに〈作家太宰治〉が大きな一歩を踏み出したのが、昭和八年である。このように〈作家太宰治〉にとっても記念碑的作品である「魚服記」の原稿の印象を、「海豹」同人で詩人・作家の木山捷平は、次のように書き記している。

いざ校正の段になつて、太宰の原稿をみると、太宰は原稿を毛筆で書いてゐるのである。赤系統のケイのある半ペラの原稿用紙に、習字の清書でもしたかのやうに、一字一畫といへどもおろそかにしない、力のこもった筆蹟で書いてゐるのである。僕はその、何度か書き直したであらう精進ぶりに壓倒された。

「一字一畫といへどもおろそかにしない、力のこもった筆蹟」、「何度か書き直したであらう精進ぶりに壓倒された」という木山の言葉から透けて見えるものがある。それは、「魚服記」にかける太宰の並々ならぬ思いと、周到な構成・精選された言

葉の姿であろう。この特徴は「魚服記」が短篇であることを考えれば、当然かもしれない。即ち、熟考の上に完成された作品であれば一字一句はもろろんのこと行間の含蓄まで詳細な考察に足りうる、いや、それを期待されている作品と思つて間違いない。なればこそ、この作品は、今日まで様々な角度から研究がなされてきた。

本論では、「魚服記」の主人公ともいえるスワの成長を、都の学生の死を目撃する以前と以後から整理し、「滝壺」をめぐる「トボス」の描き分けを指摘する。そのうえで、最終章である第四章を検討し、成長に伴つてスワが志向したものと、彼女がとらわれている現実を明らかにする。

一、学生の死を目撃するまで ―〈滝壺周辺〉での生活

「魚服記」を解するにおいて、「スワの成長」は重要なテーマである。既に指摘されている点も含め、都の学生の死を目撃する以前のスワについてまず整理しておきたい。

スワが「十三」歳の時、父は「滝壺のわきに丸太とよしずで小さい茶店」をこしらえた。この頃のスワは次のように描写される。

スワは父親のあとからはだしばたばたついて行つた。父親はすぐ炭小屋へ帰つてゆくが、スワは一人ゐのこつて店番するのだつた。遊山の人影がちらとでも見えると、やすんで行きせえ、と大声で呼びかけるのだ。父親がさう言へと申しつけたからである。

また、

スワを茶店にひとり置いても心配はなかつた。山に生れた鬼子であるから、岩根を踏みはづしたり滝壺へ吸ひこまれたりする氣づかひがないのだつた。天氣が良いとスワは裸身になつて滝壺のすぐ近くまで泳いで行つた。泳ぎながらも客ら

しい人を見つけると、あかちやけた短い髪を元氣よくかきあげてから、やすんで行きせえ、と叫んだ。

とも描写されており、青木京子はこれらを引用して、「少女期のスワは〈鬼子〉と造形されるが、むしろ〈無邪氣〉で〈従順〉な少女として造形されている。」と分析している。確かにその通りである。「父親のあと」を「ぱたぱたついて行」き、「父親がさう言えと申しつけたから」「遊山の人影」に「大声で呼びかける」スワの様子は、父を慕う「従順」さや「無邪氣」さを示している。また、「はだし」・「裸身」・「鬼子」という言葉からはスワの野性味が、「あかちやけた短い髪を元氣よくかきあげ」る様子からは、無駄に思案に暮れることの無い、純粹無垢な少女がイメージできる。これらのことをよく示しているのは、当時のスワを描写する次の部分である。

どうどうと落ちる滝を眺めては、こんなに沢山水が落ちてはいつかきつとなくなつて了ふにちがひない、と期待したり、滝の形はどうしてかういつも同じなのだらう、といぶかしがつたりしてゐたものであつた。

この当時のスワは目の疑問にただ「いぶかしが」るだけである。が、描写は同時に、物事を思案深く捉え始めたスワを伝えている。それは、自分の存在をスワが問い直すその時が刻一刻と迫っていることでもある。

ここで、作品の背景となる、スワと父の生活空間について確認しておきたい。指摘されている通り、この小説はフォークロアの空気に満ちている。小説冒頭を常に意識した太宰が、「魚服記」を「本州の北端の山脈は、ほんじゅ山脈といふのである」という一文から書き初めたことは象徴的である。「本州」から、物語の舞台である「馬禿山」の「滝」へ徐々にクローズアップするこの冒頭は、「魚服記」のフォークロア性を支える。また、この舞台設定について児童文学作家の久保喬は、重要な回想を残している。

ほかの日また、太宰は私に、

「これ読んでみたまえ。」と云つて、押入れから一冊の本を取り出してきた。柳田国男の「山の人生」の巻頭の短い文で、

(中略)

読んだあとで私も心に突き刺さるような印象を受けたが、何も云えない。太宰もただ黙っていた。

ここで「山の人生」の巻頭の短い文」としてあげられているのは、「山の人生」の「一 山に埋もれたる人生あること」である。中でも久保は、山の炭焼小屋で深刻な貧困にあえぐ父と二人の子供の話を書いている。その内容はこうだ。ある秋の末、父がふと見ると子供たちが大きな斧を磨いでいる。子供たちはその斧で自分たちを殺すように迫り、父は後先考えず二人の首を打ち落としてしまった。⁽⁴⁾子供たちが自分たちを殺すように迫り、父がそれを受け入れてしまった背景には、山の暮らしにくみられる〈貧困〉と、他者の少ない〈閉鎖された空間〉がある。スワと父の生活もまた、「他の小屋と余程はなれて建てられた」「炭焼小屋」で営まれており、そこは「天狗」や「あづきをとぐ」誰か、「山人」がいても疑いを持たないような〈閉鎖された空間〉である。以上のように、柳田が書き記した『山の人生』を太宰が久保に見せたという久保の回想も、スワと父が互いの存在を同一視する感覚を物語る一つの証左となる。おそらく太宰は「山の人生」を久保に示して、執筆の手の内の一つを明かしたのだろう。

こうした背景を踏まえて、一つの問題に触れておきたい。それは「十五」になってスワが巻き込まれる、父との近親姦をめぐる問題である。後にも触れるが、「疼痛。からだがいびれるほど重かった。ついであのくさい呼吸を聞いた。」という姦通の場面は、「あの」である限り、「炭でも草でもそれがいい値で売れると、きまつて酒くさいいきをしてかへつた」父であることは明らかである。よってこの「疼痛」は、父が娘を犯したことを意味する。ではこの近親姦は、スワにとって前ぶれないものであったのだろうか。この問題は従来ほとんど触れられてこなかったが、スワの日常を考えるためにも重要である。

結論からいえば、父はスワにモレステーションを行っていたと考えられる。「モレステーション molestation」とは、「日本で一般に「いたずら」と呼ばれる、性交までにはいたらない性行為の強制」のことである。スワがこのモレステーションをされていることは、父が語る三郎と八郎の物語に象徴的である。父は「スワを抱いて炭窯の番をしながら」「三郎と八郎という「きこりの兄弟」の話をする。それは、兄である三郎を裏切つて魚を全て食べてしまった弟の八郎が、川に棲む「おそろしい大蛇」

となつて、「泣き泣き」兄弟が「呼び合つ」ても「どうする事も出来なかつた」という話だ。従来この話は原典を特定することとに焦点が合わせられてきたが、この話を語る父の思惑もまた問われてしかるべきであろう。「兄弟」ではないが、「親子」として血のつながりを有する自分とスワを、父は物語に登場する「兄弟」に重ね合わせた。そして、自分を裏切れば「おそろしい大蛇」になるほどの事態が待っていることを、感覚的にスワに刷り込もうとしていたのではないか。実際、近親姦を強要する者がその相手を脅すことはよくみられる。⁽⁶⁾ このように、父がスワを脅したことは、父とスワの間に既に裏切りの可能性を秘めた何かがあることを意味している。では、スワはその父にどのように応じたか。彼女は父と離れることに「あはれ」を感じ、一生懸命「父親の炭の粉だらけの指を小さな口におしこんで泣く。前述の通り、他者の少ない閉鎖空間で日々を送るスワにとって、父は相対化しようのない唯一の身近な他者であり、ゆえに「あはれ」を感じるのは当然であろう。しかしその気持ち表現する、父の「炭の粉だらけの指」を自らの「小さな口におしこむスワの行為は、どうしても性的印象を免れず、スワが自分の「あはれ」な気持ちを表現するためにこの行為を選んだことは、むしろスワと父の間のモレスティションの存在を補強している。しかもそれは、この話を回想するスワにとって「むかし」の話なのである。以上の点から、スワと父の間には、長きにわたるモレスティションが存在していたことが確認できる。

このように解釈すると、「スワが十三の時」に父が茶店をこしらえたことも意味深い。後に触れるが、発達心理学では「12歳ごろ」から「青年期」が始まると考えられており、「青年期」には「身体の急激な変化が生じ」、それに伴って精神面でも「自己同一性（アイデンティティ）」を求めるなどの変化が生じ始める。⁽⁷⁾ 茶店がこしらえられた時「十三」のスワは、ちょうどこの青年期にある。そんなスワが客寄せになることを期待して、父は茶店を作った。しかしそれは、スワにとって父以外の他者と出会う機会でもあり、父からすれば、モレスティションが人にもれたり、スワが自分に不満を抱く恐れでもある。ゆえに父は、「滝壺のわき」に茶店をこしらえた。つまり、地理的な条件やこの家族の他者との関わり方はもちろんであるが、水の近くにスワをおくことで、あの三郎と八郎の話をスワが忘れぬことを、父は期待したのではないか。だからこそスワは、十五歳

になつてもなお三郎と八郎の話を忘れず、自らのアイデンティティを問う際に、父と自分のこれまでと、そしてこれからを象徴するこの話を回想したのである。

ここまでの内容をトボスに注目してまとめておきたい。学生の死を目撃するまでのスワと父との生活は、「滝壺のわき」・「滝壺のすぐ近く」・「滝壺のかたはら」といった滝壺の周辺を舞台に全て語られている。つまり、滝壺周辺という舞台は、父や、山でのスワの生活を象徴している。以後本論では、この滝壺周辺のトボスを〈滝壺周辺〉として表記し、後に登場する「滝壺」が示すトボスを、〈滝壺〉として表記していく。二章では、この〈滝壺周辺〉の日々が〈滝壺〉への憧れに変わる、学生の死を目撃して以後のスワを検討していきたい。

二、学生の死以後 ―芽生えた〈滝壺〉への憧れ

スワに大きな成長をもたらし、なおかつその成長を自覚させた直接のきっかけは、都の学生の死である。

滝の附近に居合せた四五人がそれ（論者注・学生が死に至る様子）を目撃した。しかし、淵のそばの茶店にある十五になる女の子が一番はつきりとそれを見た。

都の学生の死はこの小説展開上〈起〉にあたり、「魚服記」の物語を紡ぐ重要な事件として扱われる。引用部分ではまだ「女の子」として表記されていたスワは、この事件を目撃したことで、「スワ」という固有性を獲得する。また、前掲引用部分の「一番はつきりと」スワが学生の死を目撃したというその記述からも、スワの成長に青年がいかに大きな役割を果たしたかが読み取れる。

では、十五歳の「夏の終りごろ」目撃した学生の死以後のスワの描写を、その成長がわかるよう、発達心理学の観点から整

理していきたい。一章でも触れた通り「12歳ごろ」から「青年期」は始まり、この時期に「女性にとつては初潮を迎える、乳房が発達してくる、体つきが丸みを帯びてくる等の性的成熟や身体の変化が特徴的な」「第2次性徴」が発現する。また、「身体の急激な変化が生じる」ことと並行して、「認知能力の発達や対人関係の広がりなどの要因から自分に注意が向き、エリクソンのいう自己同一性（アイデンティティ）が問題となる」⁽¹⁰⁾。スワにも同様の変化が見られることを、「第2次性徴」「認知能力の発達」「対人関係の広がり」「自己同一性（アイデンティティ）」の四点から、具体的に確認する。

まず、「第2次性徴」についてである。青木京子は、松岡利夫「婚姻の儀礼と習俗」を引用して、次のように指摘している。⁽¹²⁾

津軽の婚姻風習で考えれば、娘は「十三歳」で「女」になり、性的成熟期を意味する。さらに「十五歳」になると「一人前」と見なされ、結婚適齢期といえる。スワは初潮を迎え「をんな」になって、結婚の対象とされたのである。

スワにこうした身体的変化があったことは、その年齢から予想される。また、父はこのように性的に成熟するスワに気づいており、それは「スワがそろそろ一人前のをんなになった」と判断していることに明らかである。スワもこの父の判断に気づいて、日々繰り返されるモレステーションがエスカレートすることを察知していた。そのことを示しているのが、「ぼんが過ぎて茶店をたゝんでから」が「スワのいちばんいやな季節」であるという語りである。インセスト（近親姦）の起きやすい状況の一つに、閉鎖空間だけではなく、「多くは飲酒時に、インセストが起ころ」という指摘がある。茶店をたたんで後は炭や草を売って生計を立てているスワの父は、「炭でも草でもそれがいい値で売れると、きまつて酒くさいきをしてかへ」り、「たまにはスワへも鏡のついた紙の財布やなにかを買つて来て」、スワにモレステーションを行う。だからこそ、炭や草を父が売りにいく「ぼんが過ぎて茶店をたゝんでから」が、「スワのいちばんいやな季節」なのである。初潮を迎えているであろうスワにとつて、モレステーションは性交の可能性を意味する、目の前に迫った大きな問題であった。

次に「認知能力の発達」について見ていきたい。これは滝を見るスワの眼に明らかである。

それがこのごろになつて、すこし思案ぶかくなつたのである。

滝の形はけつして同じでないといふことを見つけた。しぶきのはねる模様でも、滝の幅でも、眼まぐるしく変つてゐるのがわかつた。果ては、滝は水でない、雲なのだ、といふことも知つた。滝口から落ちると白くもくもくふくれ上る案配からでもそれと察しられた。だいいち水がこんなにまでしろくなる訳はない、と思つたのである。

本論一章で触れた「それまで」「いぶかしが」るにとどまつていた滝の変化を、スワは「思案ぶかく」考え、認知しようとしている。その認知が非常に高度なものであることもこの引用から窺える。

続いて「対人関係の広がり」であるが、「十三」歳の時に茶店がこしらえられ、「山へ遊びに来る人」と接する機会ができたことは、少数であろうともスワに、「対人関係の広がり」をもたらした。中でも重要なのは、やはり都の学生である。都の学生とスワに直接の接点があつたかは、作中から判断できない。しかし、スワには大した価値のない「羊齒類」を、夏休みを利用して命がけで採集しようとした学生は、スワの価値観を揺さぶつてその心に衝撃を与えるに足る存在であつた。これまで父や山の生活しか知らなかつたスワは学生をきっかけにその内的世界を多元的なものにし、こうしてスワの前に都の新しい世界が開けたのである。

なめこといふぬらぬらした豆きのこは大変ねだんがよかつた。それは羊齒類の密生してゐる腐木へかたまつてはえてゐるのだつた。スワはさうした苔を眺めるごとに、たつた一人のともだちのことを追想した。蕈のいつぱいつまつた籠の上へ青い苔をふりまいて、小屋へ持つて帰るのが好きであつた。

亡くなった都の学生が「羊齒類」を採集していたことから、「たつた一人のともだち」は都の学生を示している。また「蕈のいつぱいつまつた籠の上へ青い苔をふりまいて、小屋へ持つて帰るのが好きであつた」という一文は、「炭でも蕈でもそれがいい値で売れると、きまつて酒くさいいきをしてかへ」る父を思えば、一見矛盾した行動と感情のように思われる。だが、「羊齒類」を採集していた学生への思いを、スワが小屋で追体験していたと考えればそこに矛盾はない。「恋愛感情は、基本的には異性に対する友情（友愛）から出発する」という指摘があるが、都の学生を「たつた一人のともだち」とする表現から、学

生に恋心を抱くスワを読み取る事は可能である。しかし本論では、都の学生が象徴する都会や知性に、スワが憧れを抱いていたという意味合いを重視する。

こうして都の学生の存在がスワのなかで大きくなるにつれて、性欲に基づいた父の行為はスワの眼に不純として映り、変わりゆく自らの身体に近親姦の危うさをより意識するようになる。同時にこれまでの生活を客観視し、自らのアイデンティティや、人間の生死についてスワは深く考え始める。これが最後の観点、「自己同一性（アイデンティティ）」である。スワが自身のアイデンティティを捉え直すためには、唯一の身近な他者である父はやはり、重要な位置を占める。ゆえにスワは「自己同一性（アイデンティティ）」の問いの矛先を父に向け、「おめえ、なにに生きざるば」と問い、答えられない父に「くたばった方あ、いいんだに」と告げる。父は「スワの気が立つて来たのをとうから見抜いて」おり、「そろそろ一人前のをんなになったからだな、と考へて」「ぶちのめさ」ず「堪忍」する。この反応から、娘に痛いところを突かれた父の心情が読み取れる。ここにはまた、青年期にみられる親と子の関係の変化がくつきり現われている。

子どもの親に対する捉え方の変化とは、親を「絶対的な存在」という見方から、「自分とは異なる考えを持つ存在」という見方に徐々に変わることを指している。自分自身の考えを持てるようになると、それまでは「従うべき絶対的な存在」とみなしていた親に対して、徐々に親とは異なる自分の考え・判断を主張するようになるという指摘^⑤は、先ほどのスワの変化を説明していて興味深い。

ここまで《スワの成長》を青年期に特有の変化から整理してきたが、一章で確認した純粹無垢な少女スワが、都の学生の死を経て、身体的にも精神的にも成長していることが改めて窺える。またこうした成長過程をたどることで、スワが都の新しい世界に希望を抱いており、《滝壺》が、学生や都の知的な世界を示すトポスであることも確認できる。

そんな中、スワと父との別離を決定づける近親姦が、ついに現実となってしまう。

めづらしくけふは髪をゆつてみたのである。ぐるぐる巻いた髪の毛の根へ、父親の土産の浪模様がついたたけながをむすんだ。

それから焚火をうんと燃やして父親の帰るのを待った。

この日に限って「たけながをむすん」でいたスワは、これまで様々に解釈されてきた。本論では、モレスティシヨンの日々を終わらせようとする、スワの〈決意〉として捉えたい。前述の通り「土産」は、炭や蕈がいい値で売れて、酒を飲んだ父を象徴する。また、「たけなが」が結ぶものであることも重要である。つまりスワは、モレスティシヨンの象徴である「土産」の「たけなが」を結ぶことで、モレスティシヨンの日々を終りにしようとしたのである。こうしたスワの決意を知ってか知らずか、父はスワを犯す。その際スワが「短く叫んだ」「阿呆」という言葉は、生きる意味を答えられなかった父に「馬鹿くさ」さを感じてスワが発した言葉でもある。しかしその言葉は、「嘔鳴」りから「叫」びに変わって、いつきに父に対する軽蔑へと傾斜している。

父は父である、という一握りの期待すら裏切られたスワの思いは、「おどー」と「ひくく言つて」滝に「飛び込んだ」ことに表われる。ではなぜ、スワが向かったのは滝だったのか。その疑問を解決するためにまず確認すべきことは、「魚服記」において、白や青色のイメージを担うのは都の学生だということである。それは「色の白い都の学生」や、学生が着ていた「青色のシャツ」に起因する。だからこそ父に犯される前にスワが見た「初雪」も、「白いもの」としてスワの心を「うきうき」させたのである。同様に、近親姦の後に外へ飛び出したスワの顔には「吹雪」が迫って、「みるみる髪も着物もまつしろになる」。これがスワを滝に向かわせた要因である。つまりスワは、「吹雪」にあうことで都の学生や都を希望とする自身の気持ちを思い出し、都へとつながる唯一の希望の地、青年の死の場である滝へと向かった。しかし滝に飛び込む際、スワが「おどー」と叫んでいたことから、父やこれまでの生活と決別できないまま、スワは真冬の滝へと飛び込み、その生を奪われた。

三、「鮎」としてのスワ ―〈滝壺〉という最後の希望

滝に飛び込んで後のスワを描く第四章を、作品に沿いつつ検討していきたい。

第四章は、「気がつくあたりは薄暗いのだ。滝の轟きが幽かに感じられた。」と始まる。ここで注目しておきたいのは、「滝の轟き」が「幽かに感じられた」ことである。「滝の轟き」という言葉は、第一章、都の学生の死の場「滝壺」の説明で、一度だけ、「羊歯類は此の絶壁のあちこちにも生えてゐて、滝のとゞろきにしじゅうぶるぶるとそよいでゐるのだつた。」と用いられている。「羊歯類」が学生の採集物であつたことから、「滝のとゞろき」には、学生のイメージが付されている。このことを第四章の冒頭に重ね合わせてみると、滝に飛び込んだスワが「幽かに感じ」たことは、学生ひいては都への希望となる。その希望がもたらす幸福感は、滝の轟きを感じて「響きにつれてゆらゆら動くスワの描写や、「滝のとゞろき」から「水底へ引きずりこまれた」学生を思い出し、自身の居所を「水の底」だと判断したスワに見て取れる。なぜなら「水の底」という場が、スワを「やたらむしやうにすつきり」させ、「さつぱり」させているからである。この感情は「学生」を思い出すことに拠っているが、一方で父の不在も関係している。作中では「なんでもなささうに眩きながら滝を見上げる」ことしかしなかつた父は、水中の世界を知らない存在として描かれているのである。

その後スワは、自らが「大蛇になつてしまつた」と思う。言うまでもなくこの「大蛇」は、父が昔スワに語つた三郎と八郎の物語に登場した「大蛇」のイメージを継承しており、裏切りをはたらいて「大蛇」になつた八郎に、スワが自身を重ねたことがわかる。その後の「うれしな、もう小屋へ帰れないのだ」という「ひとりごと」からも、父との別れを喜びながら、一方で父を裏切つた自身の行動に後味の悪さを感じるスワが読み取れ、それはまたいかにスワが父を思い、その父にさいなまれてきたのかを表している。

しかし実際には、スワは「おそろしい大蛇」ではなく、「小さな鮎」に変身していた。後に考察するが、第四章は「鮎は滝

壺のちかくの淵をあちこちと泳ぎまはつた。」という一文を境に、内面描写から客観描写へとその描写の方法を変えている。同様の指摘は、既に曾根博義の言及するところである。

この結末部は、前半七行目までがスワを視点にした内面描写、後半八行目以下、最後までがスワを外面から見た客観描写になっている。

この引用部で「前半七行目まで」と示されるのは、第四章の「氣がつくと」から「大きくうごかした。」までであり、「後半八行目以下」は、「小さな鮎であつたのである。」から第四章最後までを指している。このように、曾根氏のいうところの「後半八行目以下」が「スワを視点にした内面描写」でないことは、鮎であるスワの行動がそのままスワの内面を推測する唯一の手がかりになることを意味する。ではその行動とはいかなるものであったのか。まずはこの点を確認しておく。それは、「滝壺のちかくの淵をあちこちと泳ぎまはつて」、「胸鰭をびらびらさせて水面へ浮んで来たかと思ふと、つと尾鰭をつよく振つて底深くもぐりこ」み、「水のなかの小えびを追つかけたり、岸辺の葦のしげみに隠れて見たり」、「苔をすすつたりして遊」というものである。その後鮎は「じつとうごかなくなつて」、最後に「まつすぐに滝壺へむか」う。これらの行動を読み取るにあたり、ここで再度本論一・二章で触れてきた〈滝壺周辺〉と〈滝壺〉を再考しておきたい。

「魚服記」において、〈滝壺周辺〉と〈滝壺〉は、一定の法則のもと使い分けられている。まず「滝壺のちかく」をはじめとする〈滝壺周辺〉である。

・ 父親は滝壺のわきに丸太とよしずで小さい茶店をこしらへた。

・ 天気が良いとスワは裸身になつて滝壺のすぐ近くまで泳いで行つた。

・ スワはその日もぼんやり滝壺のかたはらに佇んでゐた。

傍線部に注目したい。父が「滝壺のわき」に茶店をこしらえたため、語られるスワの日常は「滝壺のわき」を中心に営まれる。時にスワは「滝壺のすぐ近くまで泳い」で過ごし、時に「ぼんやり滝壺のかたわらに佇んで」、「むかし」父が語った三郎と八

郎の物語を思う。以上の点から《滝壺周辺》は、スワと父との日々を担うトボスとして存在していることが確認できる。

一方《滝壺》は、

・ 滝壺は三方が高い絶壁で、西側の一面だけが狭くひらいて、そこから谷川が岩を噛みつつ流れ出てゐた。絶壁は滝のしぶきでいつも濡れてゐた。(中略)／学生はこの絶壁によちのぼった。(論者注・「／」は改行を表す)

・ いちど、(論者注・都の学生が)滝壺ふかく沈められて、

・ 山に生れた鬼子であるから、岩根を踏みはづしたり滝壺へ吸ひこまれたりする気づかひがないのだつた。

と用いられ、都の学生とともに語られていることは明らかである。三つ目の中黒は、「鬼子」と形容されていた頃のスワは都の世界に目覚めることがないと解釈することで、都とともに《滝壺》が語られていることの一つの証左になる。これらから、《滝壺》を都の学生、そして彼からつながる都会の知的な雰囲気を表すトボスとする。

このように《滝壺周辺》と《滝壺》を再考すると、第四章後半部、先ほどのスワの行動も新たな意味を帯びてくる。鮎になつてしばらく「滝壺のちかくの淵をあちこちと泳ぎまはつた」スワは、《滝壺周辺》を泳ぐことで父の不在を確認しているかのようである。そしてその不在を確認した後、彼女は非日常を謳歌して、「胸鰭をびらびらさせて水面へ浮んで来たかと思ふと、つと尾鰭をつよく振つて底深くもぐりこむ。小説展開からいつて《結》にあたるこの描写は、《起》の学生の死の場面、「滝壺ふかく沈められて、それから、すらつと上半身が水面から躍りあがつて」「それきりまたぐつと水底へ引きずりこまれた」という記述と呼応して、学生を模倣するスワがよみとれる。さらにその後スワが、「水のなかの小えびを追っかけたり、岸辺の葦のしげみに隠れて見たり」、「たつた一人のともだち」を思わせる「苔」を「すすつたりして遊んでゐる」ことから、都の希望が感じられるこの非日常を、彼女は楽しんでいるのだとわかる。しかしそのような非日常も、やがて日常となり、小説はいつきに悼尾へと向かう。

それから鮎はじつとうごかなくなつた。時折、胸鰭をこまかくそよがせるだけである。なにか考へてゐるらしかつた。

しばらくさうしてゐた。

やがてからだをくねらせながらまつすぐに滝壺へむかつて行つた。たちまち、くると木の葉のやうに吸ひこまれた。スワは「考へ」た末、「からだをくねらせながらまつすぐに滝壺へむかつて行つ」て、「たちまち、くると木の葉のやうに吸ひこまれ」る。この部分は「魚服記」を解するにおいて重要な部分で、中でもスワが滝壺に向かったことは先行研究における最大の論点である。最もよく指摘される「二度目の自殺」説から、「(ともだち)との永遠のメルヘンの世界に旅立つて行く」といったものなど、その解釈は様々であるが、本論では、学生や都の知的な世界を示すトポス(滝壺)を重視し、迷いなく「まつすぐに」、スワが都の学生へつながる都を志向したと捉えておきたい。しかしスワはただ都を望む気持ちだけで「滝壺へむかつ」たのか、という疑問は残る。ここで先ほどの、第四章の描写の変化に話を戻し、その変化の意味を探っていく。内面描写から客観描写への切り替わりによって生まれた最大の特徴は、自らを「大蛇」だと思つて後のスワの内面が読み取れないことにある。それは、スワの内面が語られなかったのはなぜか、という問いに換言できる。

ここで、「魚服記」に関する太宰治の感懷を二つ参照したい。一つ目は、昭和八年三月二十五日発行の「海豹通信」第七便、「魚服記に就て」⁽¹⁸⁾である。

魚服記といふのは支那の古い書物にをさめられてゐる短かい物語の題ださうです。それを日本の上田秋成が翻譯して、題も夢応の鯉魚と改め、雨月物語巻の二に収録しました。

私はせつない生活をしてゐた期間にこの雨月物語をよみました。夢応の鯉魚は、三井寺の興義といふ鯉の画のうまい僧の、ひととせ大病にかかつて、その魂魄が金色の鯉となつて琵琶湖を心ゆくまで逍遙した、といふ話なのですが、私は之をよんで、魚になりたいと思ひました。魚になつて日頃私を辱しめ虐げてゐる人たちを笑つてやらうと考へました。

私のこの企ては、どうやら失敗したやうであります。笑つてやらう、などといふのが、そもそもよくない料簡だつたのかも知れません。

二つ目に、一つ目の文章より少し前に書かれた、昭和八年三月一日付木山捷平宛書簡⁽¹⁹⁾を参照する。

ここで鳥渡私の「魚服記」に就いて言はせていただきます。あれは、やはり、仕事に取りかゝる前から、結びの一句を考へてやつたものでした。「三日のうちにスワの無慙な死体が村の橋杣に漂着した」といふ一句でした。それを後になつてけづりました。私の力では、とてもさうした大それた真実迄に飛躍させることが出来ないと思つてあります。

私は、ずるかつたのです。(中略) この態度はよくありませんでした。たとひ、その為に、作品の構成が破れ、所謂批評家から味噌糞に言はれようと、作者の意図は、声がかれても力が尽きても言ひ張らねばいけないことでした。私は深く後悔してゐます。

これら二つの文章からは、「魚服記」の執筆動機が読み取れる。まず一つ目「魚服記に就て」からは、「魚になつて日頃私を辱しめ虐げてゐる人たちを笑つてやらう」という言葉が執筆動機にあたる。この言葉を「魚服記」にあてはめると、「魚」がスワで、「日頃私を辱しめ虐げてゐる人」がスワの父となる。つまり、スワが父を嘲笑うことに「失敗した」と解釈することができる。次に、二つ目の木山捷平宛書簡からは、「仕事に取りかゝる前から」「三日のうちにスワの無慙な死体が村の橋杣に漂着した」という「結びの一句」が、執筆当初から考えられていたことに着目しておきたい。その一句は「大それた」、つまり道理にはずれた「真実」であつたと太宰は語る。確かに「辱しめ虐げ」られたものの死、つまり「魚服記」でいうところのスワの死は、道理にはずれた「真実」である。しかしこの「結びの一句」が残酷であるからこそ、「辱しめ虐げてゐる人たちを笑つてや」という先ほどの執筆動機が果たせるのである。とはいえ、この「結びの一句」は最終的に削られて、試みは失敗に終わった。

つまり両文章からみえる太宰の深い後悔は、ひとえに「魚になつて日頃私を辱しめ虐げてゐる人たちを笑つてやらう」という執筆動機の頓挫に起因している。この頓挫によって、「辱しめ虐げてゐる人たち」は、他者や世間から直接非難されることなく、一方で「辱しめ虐げ」られた人は、彼らを嘲笑うこともできず、彼らから逃れることもできなくなつた。「魚服記」に

即して言えば、太宰の執筆動機の頓挫によって、父は嘲笑われることなく、一方、「魚」になってもスワは父の影にさいなまれることになったのである。だからこそ、太宰はこの執筆動機の頓挫に、「深く後悔」していたのではないか。

「大蛇になつ」たと思うスワを境に第四章の客観描写が始まることは、この太宰の後悔と深い関係にある。客観描写は、前述の通りスワの内面がはつきりと描かれないことを意味する。従つて、スワが大蛇であることを語り手が示す一方で、スワ自身は自分のことを大蛇だと思ひ、続けている可能性は多分に考えられるのである。もちろん、スワが裏切り者を意味する「大蛇」ではなくて「鮒」に変身していたことから、スワは父から解き放たれてよかつたはずである。また、父から逃れられないスワの内面がここで描かれていれば、当初の太宰の執筆動機は、「結びの一句」がなくても果たされたかもしれない。なぜなら、読者が父にさいなまれるスワを目の当たりにすることによって、結果的に父の行為の醜さが告発されるためである。しかし結果的に太宰はスワの内面をはつきり描かず、客観描写を用いてスワの行動のみを語り手に語らせ、読者にその判断を委ねた。つまり自身で描きさることから、逃げたのである。

以上を踏まえて、「滝壺へ向か」う小説悼尾のスワの思いを考察しておきたい。太宰の後悔の程度から、スワが自分のことを大蛇だと思ひ続けている可能性はむしろ高い。つまり小説悼尾のスワは、いまだ逃れられない父の影を背負いながら、わずかな希望へとその身をつなぐべく、「滝壺へ向か」つたのである。小説はここで幕を閉じる。このことは、スワが小説内にのみ存在していることから、ひいては永遠にスワが父にさいなまれ続けることを意味している。

おわりに

本論では〈スワの成長〉を整理することで、〈滝壺周辺〉と〈滝壺〉の描き分けを指摘し、そのうえで最終章・第四章を、「魚服記」についての太宰の感懷を引用しながら解釈した。

繰り返しになるが、太宰は、「魚になつて日頃私を辱しめ虐げてゐる人たちを笑つてやらう」という「作者の意図」を、「声がかれても力が尽きても言ひ張」れなかった自分に、「深く後悔してゐる」。太宰にとつてのこの「失敗」は、結果的に読者の役割を拡大し、作品解釈の幅を広げ、作品の完成度を高めた。魚になつたスワの行く末をめぐる解釈は、その一つの例であろう。しかしそのことと引き換えに、スワは永遠に、「小さな鮎」でありながら「おそろしい大蛇」を背負うことになつた。つまり「辱しめ虐げてゐる人」から、逃れられなくなつてしまつたのである。

注

(1) 木山捷平「『海豹』のころ」太宰治『太宰治全集2』（一九九八年五月二十五日、筑摩書房）。初出は『太宰治全集』月報1（一九五五年十月十五日、筑摩書房）。

(2・12) 青木京子「『魚服記』論——『山の人生』との比較を中心として——」青木京子『太宰文学の女性像』（二〇〇六年六月十九日、思文閣出版）。初出は『佛教大学大学院紀要』第三二号（二〇〇四年三月、佛教大学）。

(3) 久保喬「太宰治の青春碑」橋中雄二編集『群像』第三十六卷第七号（一九八一年七月一日、講談社）

(4) 柳田国男『遠野物語・山の人生』（一九七六年四月十六日初版・二〇〇七年十月四日改版発行、岩波書店）

(5) エレン・バス・スライズ・ソーントン編・森田ゆり訳『誰にも言えなかつた 子ども時代性暴力を受けた女性たちの体験記』（一九九一年六月六日、築地書館）。

(6) 近親姦を強いるものが、近親姦を公言せぬ様に強要する例はよくみられる。池田由子『汝わが子を犯すなかれ——日本の近親姦と性的虐待——』（一九九一年四月一日、弘文堂）にも、「沈黙を強い」るインセスト直後の父親が指摘されている。

(7・8・10) 榎本博明編著『おうふう心理ライブラリー 発達心理学』（二〇一〇年十月二十五日、おうふう）。第2章、熊野道子「発達段階と発達課題」より引用。

(9・15) (7) の書物に同じ。第4章、天谷祐子「青年期の心の発達」より引用。

(11) (7) 参照。

(13) (6) の書物に同じ。

(14) 落合良行・楠見孝責任編集『講座 生涯発達心理学 第4巻 自己への問い直し——青年期』(一九九五年十月二十日、金子書房)。第6章、宮下一博「青年期の同世代関係」より引用。

(16) 曾根博義「『魚服記』の物語形式」山内祥史編『太宰治研究 1』(一九九四年六月十九日、和泉書院)

(17) 「二度目の自殺」説については、相馬正一『評伝太宰治 第二部』(一九八三年七月三十日、筑摩書房)所収の第一章、「『海豹』のころ」などにみられる。また、「永遠のメルヘンの世界に旅立」という解釈は、『新編 太宰治研究叢書 1』(一九九二年四月三十日、近代文藝社)所収の、竹腰幸夫「『魚服記』〈老いぼれた人の横顔〉考」にみられる。

(18) 太宰治『太宰治全集第十巻』(一九九〇年十二月二十五日、筑摩書房)

(19) 太宰治『太宰治全集第十一巻』(一九九一年三月二十日、筑摩書房)

※「魚服記」本文は、太宰治『太宰治全集第一巻』(一九八九年六月十九日、筑摩書房)によった。

※引用に際して、読点は「、」で統一した。また、旧字は一部新字に改めた。

※本論での「父」はスワの父を、「学生」は滝から転落死した「都の学生」を意味する。

(やまだ・かな 本学大学院博士後期課程)